

青年期における学校から仕事への移行と キャリア教育のあり方について

上田富美子*・柴山謙二

On Transition from School to Work during Adolescence and Career Education

Fumiko UEDA and Kenji SHIBAYAMA

(Received October 1, 2010)

The present study was an attempt to identify contributing factors to both vocational decision and vocational indecision during adolescence, focusing on adolescent student's relations to their significant other and their psychological aspects seen through the process of vocational choices. Based on the results obtained from the study, career education which could possibly answer their needs was discussed. In this study, senior university students were surveyed by questionnaire to gauge their vocational awareness. As a result, it was revealed that for male students, independence from others contributed to vocational decision-making, and for female students, self-actualization was an important factor. It was also indicated that a coping strategy, in which a student changes his/her own cognition positively under stressful conditions to lessen stress responses, contributed to vocational decision.

Key words : career education, vocational decision, adolescent

問 題

「自分探し」は、国が打ち出す教育基本政策にも盛り込まれるようになり、中央教育審議会答申（1997）は、「教育は『自分さがしの旅』を扶ける営みであり、子どもたちが個性を見だし自らにふさわしい生き方を選択するといった自己実現のための支援」と位置づけている（岡田, 2007）。そこには、本来子どもの個性を引き出した上で、さらにそれを伸ばすことも意図されていたはずだが、その視点は徐々に薄れ、自分探しの部分だけが残ってしまった（岡田, 2007）。本来、自分らしさを持つということは、本人が自分の個性を認識するだけでなく、その個性を他者からも認められていると感じられることが重要である（岡田, 2007）。それゆえ、自分らしさが成立するには他者からの評価は必要であり、他者の存在を無視した自分らしさとは自己中心的と言わざるを得ないだろう。

姜（2008）は、人が社会に出て一人前になるということは、他人同士が集まった中で、自分の存在を他

者から承認される必要があり、働くことはその承認を得るための手段だとし、「人はなぜ働かなければならないか」という問いに対しては、「他者からのアテンション」そして「他者へのアテンション」との両方が不可欠であるとする。したがって、働くことの意味を考えるときに、他者の存在は重要であり、そして、それは家族ではない社会的他者でなければならず、この段階を飛び越えて自己実現ややりがいのある仕事など語れないという。

Erikson は、青年がアイデンティティを確立していく過程において、いわゆるモラトリアムといわれる模索する期間がある程度必要であり、その期間に青年は役割実験をするとし、それは「自分がどんな人間で、何ができるのかまだ見えてこないとき、社会の中にあるさまざまな役割を仮に引き受けてみてやってみる」というもので、青年期は試行錯誤を通じて社会での自分の位置づけをしていく時期とする（宮下・杉村, 2008）。しかし、我が国の現代青年は与えられた猶予期間中に試行錯誤を省略してしまい、他者との関わりから得られるはずの多種多様な価値観を自分の中に取

* 熊本市子ども未来局子ども育成部児童相談所

り入れたり、また自分の価値観と照らし合わせたりする機会が貧弱なまま教育の場から社会へと移行しているという現状があるのではないだろうか。

従来、初職として選択した職業がそのままの職業生活になっていた時代では、キャリア選択など考える必要がなく(渡辺・Herr, 2001)、卒業時においての一時的な進路決定がその後の人生の方向性を意味していた(下村, 2008)。原(2008)は、日本の学校教育は「大衆教育社会」を基盤にし、学校から社会に移行するためには学校教育が前提であるとの考えがあり、そこからこぼれおちる若者の存在を想定していなかったと指摘する。従来の日本のシステムはキャリア教育がなくともどうにか就労を可能にしていたため、その必要性に気づかなかつたに過ぎず(山内, 2008)、今日、学校教育の中でキャリア教育を受けることなく社会に出た者にとって、突如キャリア開発は個人責任であると会社から言われても何をどうしていいのかわからない状態に陥り、将来への不安や葛藤を抱えてしまうことになる(宮城, 2005)。

小方(2008)は、キャリア教育が雇用情勢の急激な悪化によって注目されるようになっていけば、原状回復によりその必要性もなくなっていくはずだが、このような日本特有の現象がある限り、それは一時的なブームで終わってしまっただけとはいえないと主張する。ましてや、一生涯のなかで個人が数回転職を繰り返していくことが当たり前になっていく時代には、自分のキャリアを設計することは不可欠となる(渡辺・Herr, 2001)。

以上のように、教育の大衆化や少子化により大学は全入時代に入り、大卒という肩書はもはや将来を保証する切符ではなくなり、学生は自身の将来を設計する能力がこれまで以上に求められているといえよう。したがって、学校から仕事への移行期に、アイデンティティの形成が達成できているかどうかということと、将来を見据えて職業を選択していくこととは密接な関係にあり、その選択如何ではその後の人生のあり方にも影響を及ぼすと考えられる。そして、個人は単独でアイデンティティを形成できるものではなく、その過程には家族を含めた他者の存在が介在し、また仕事に対してのやりがいは他者からの評価によるところが大きいことを考慮すると、青年期において他者とどう関わるか、他者を通じて自己をどう確立していくかということは大きな課題となる。

そこで、本研究では、現代の大学生の職業選択を通して浮かび上がる心理的側面を他者の存在との関連に焦点を当てながら明らかにし、職業既決・未決定状態を規定する要因を探索することを目的とし、以下の3点を仮説として挙げる。

仮説1：職業既決状態にある学生は、自己実現的特性(個人志向性)と社会的適応特性(社会志向性)の両側面を備えている。

仮説2：職業既決状態にある学生は、進路選択において積極的な対処法(問題焦点型もしくは情動焦点型；コーピング尺度による型)をとる。

仮説3：職業既決状態にある学生は、他者からの助言や見本と正課外活動などの体験から肯定的な影響を受けている。

方 法

1. 手続きと調査対象者

2009年11月16日～11月30日にわたり、A県の国立大学法人に在学している4年生の学生計252人を対象に質問紙調査を実施した。調査は、校内で在校生を通して個別配布個別回収形式で実施され、回答依頼時に文書で説明合意を得ており、回答は無記名で行われた。最終的な有効回答は $n = 248$ となった(男性111名、女性137名、平均年齢21.9歳、範囲21歳～26歳、標準偏差.69)。なお、全ての統計処理にはSPSS12.0を使用した。

2. 質問紙

- 1) 調査依頼およびインフォームドコンセント
- 2) 回答者の属性
- 3) 就職について活動状況と活動終了の有無(2項目)
- 4) 職業未決定尺度(下山, 1986)(3件法×38項目)
- 5) 進路選択の影響要因尺度(5件法×12項目)及び自由記述欄
- 6) 個人志向性・社会志向性PN尺度(伊藤, 1995)(5件法×30項目)
- 7) コーピング尺度(尾関, 1993)(4件法×14項目)

結 果

1. 就職活動について

1) 就職活動状況

回答者は、就職を目指す就職群、就職と試験を受ける併用群、試験を受ける受験群の3つに分かれた。

2) 就職活動終了の有無

調査時点における回答者の就職活動状況は、既に内定を取得している学生と、公務員、教員採用、大学院など進学を受験を目指している学生とに概ね二分化していることが示され、進路選択を行った結果、8割以上の学生が実質上既決状態にあることが分かった。

$P < .05$), 「積極的楽観」($F(1, 247) = 5.02, P < .05$), 「情報不足」($F(1, 247) = 34.93, P < .001$), 「積極的猶予」($F(1, 247) = 7.38, P < .01$), 「重要他者」($F(1, 247) = 11.04, P < .001$), 「経験」($F(1, 247) = 30.26, P < .001$), 「社会志向性P」($F(1, 247) = 19.54, P < .001$), 「情動焦点型」($F(1, 247) = 10.97, P < .001$)であった。性差があることが判明したので、以後の解析においては、男女別に分析をすることとした。

5. 重回帰分析による性別からみた職業既決・未決定状態の規定因

上述の通り、重回帰分析においては男女別々にそれぞれのモデルを検証した。「決定」「自信欠如」「積極的楽観」「情報不足」「不安」「絶望」「展望拡散」「積極的猶予」「安直」を従属変数とし、それぞれの従属変数について「重要他者」「恋人」「経験」「個人志向性P」「社会志向性P」「個人志向性N」「社会志向性N」「問題焦点型」「情動焦点型」「回避・逃避型」を独立変数として重回帰分析を行った。解析は強制投入法を使用した。

まず、男性における解析結果を見ると、「決定」については、31.8%の説明力が得られ($R = .564, R^2 = .318, F(10, 100) = 4.669, p < .001$), 「社会志向性N ($\beta = -.233, p < .05$)」, 「情動焦点型 ($\beta = .237, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「自信欠如」については、47.3%の説明力が得られ($R = .688, R^2 = .473, F(10, 100) = 8.963, p < .001$), 「重要他者 ($\beta = .205, p < .05$)」, 「個人志向性P ($\beta = -.473, p < .001$)」, 「社会志向性N ($\beta = .192, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「情報不足」については、28.3%の説明力が得られ($R = .532, R^2 = .283, F(10, 100) = 3.939, p < .001$), 「個人志向性P ($\beta = -.339, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。「不安」については、28.2%の説明力が得られ($R = .531, R^2 = .282, F(10, 100) = 3.937, p < .001$), 「社会志向性N ($\beta = .264, p < .05$)」, 「問題焦点型 ($\beta = .214, p < .05$)」, 「情動焦点型 ($\beta = -.232, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「絶望」については、22.8%の説明力が得られたが($R = .478, R^2 = .228, F(10, 100) = 2.956, p < .01$), 標準偏回帰係数で有意に影響を及ぼした変数はなかった。「展望拡散」については、21.1%の説明力が得られ($R = .459, R^2 = .211, F(10, 100) = 2.673, p < .01$), 「個人志向性N ($\beta = .325, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。「積極的猶予」については、21.4%の説明力が得られ($R = .463, R^2 = .214, F(10, 100) = 2.726, p < .01$), 「社会志向性P ($\beta = -.264, p < .05$)」, 「社会志向性N (β

$= .246, p < .05$)」, 「情動焦点型 ($\beta = -.295, p < .05$)」, 「回避・逃避型 ($\beta = .332, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。また、「積極的楽観」と「安直」については、標準偏回帰係数で有意に影響を及ぼした変数はなかった。

次に、女性学生における解析結果を見ると、「決定」については、30.4%の説明力が得られ($R = .551, R^2 = .304, F(10, 126) = 5.502, p < .001$), 「恋人 ($\beta = -.164, p < .05$)」, 「個人志向性P ($\beta = .510, p < .001$)」, 「情動焦点型 ($\beta = .233, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「自信欠如」については、43.8%の説明力が得られ($R = .662, R^2 = .438, F(10, 126) = 9.809, p < .001$), 「個人志向性P ($\beta = -.648, p < .001$)」, 「個人志向性N ($\beta = .201, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「情報不足」については、20.9%の説明力が得られ($R = .458, R^2 = .209, F(10, 126) = 3.336, p < .01$), 「個人志向性P ($\beta = -.415, p < .01$)」, 「回避・逃避型 ($\beta = .257, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。「不安」については、18%の説明力が得られ($R = .424, R^2 = .180, F(10, 126) = 2.761, p < .01$), 「個人志向性P ($\beta = -.415, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。「絶望」については、24.7%の説明力が得られ($R = .497, R^2 = .247, F(10, 126) = 4.122, p < .001$), 「個人志向性P ($\beta = -.534, p < .001$)」, 「個人志向性N ($\beta = .230, p < .05$)」が有意に影響を及ぼしていた。「展望拡散」については、21.1%の説明力が得られ($R = .459, R^2 = .211, F(10, 126) = 3.366, p < .01$), 「個人志向性P ($\beta = -.410, p < .01$)」, 「個人志向性N ($\beta = .310, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。「安直」については、17.2%の説明力が得られ($R = .415, R^2 = .172, F(10, 126) = 2.618, p < .01$), 「経験 ($\beta = -.195, p < .05$)」, 「社会志向性P ($\beta = -.209, p < .05$)」, 「社会志向性N ($\beta = .297, p < .01$)」が有意に影響を及ぼしていた。なお、「積極的楽観」と「積極的猶予」については、標準偏回帰係数で有意に影響を及ぼした変数はなかった。

6. 重回帰分析のまとめ

性別による重回帰分析の結果から、職業既決・未決定状態には性差による相違があることが明らかになった。(表2)

まず、既決状態について、男性は、低い「社会志向性N」と高い「情動焦点型」が説明し、女性は、低い「恋人」、高い「個人志向性P」、高い「情動焦点型」が説明していた。つまり、男性の場合は、社会不適応状態が低く、情動焦点型の対処法が職業への決定につながるのに対し、女性の場合は、恋人からの影響は少

表 2. 重回帰分析のまとめ

職業未決定尺度	従属変数	説明率 (%)	男性	説明率 (%)	女性
職業既決状態	決定	31.8	社会志向性N↓ 情動焦点型↑	30.4	恋人↓ 個人志向性P↑ 情動焦点型↑
	自信欠如	47.3	個人志向性P↓ 社会志向性N↑ 重要他者↑	43.8	個人志向性P↓ 個人志向性N↑
職業未決定状態	積極的楽観	有意差なし	有意差なし	有意差なし	有意差なし
	情報不足	28.3	個人志向性P↓	20.9	個人志向性P↓ 回避・逃避型↑
	不安	28.2	社会志向性N↑ 問題焦点型↑ 情動焦点型↓	18.0	個人志向性P↓
	絶望	22.8	有意差なし	24.7	個人志向性P↓ 個人志向性N↑
	展望拡散	21.1	個人志向性N↑	21.1	個人志向性P↓ 個人志向性N↑
	積極的猶予	21.4	社会志向性P↓ 社会志向性N↑ 情動焦点型↓ 回避・逃避型↑	有意差なし	有意差なし
	安直	有意差なし	有意差なし	17.2	経験↓ 社会志向性P↓ 社会志向性N↑

なく、自己実現志向が高く、情動焦点型の対処法が職業の決定につながるということが明らかになった。

次に、未決定状態を変数ごとにみると、8つある未決定状態のうち「積極的楽観」を規定する影響因が男女ともに認められなかった以外は、性差が見られた。

「自信欠如」では男女ともに、低い「個人志向性P」は共通しているが、男性の場合は、高い「重要他者」、高い「社会志向性N」が関連しており、女性の場合は、高い「個人志向性N」が関連していることが明らかになった。つまり、男性は自己実現志向が低く、また、友達・先輩・家族などの重要他者からの影響が強く、社会不能応状態が「自信欠如」につながり、女性は自己実現志向が低く、利己的傾向の高さが「自信欠如」に影響していることが示された。

「情報不足」については、男女ともに低い「個人志向性P」が共通して説明しているが、女性の場合は、高い「回避・逃避型」も影響していることが分かった。このことから、男性は、自己実現志向の低さのみが「情報不足」に寄与するが、女性は、これと併せて消極的対処法である「回避・逃避型」の傾向も「情報不足」に関わることが示された。

「不安」については、全く異なった性差が認められ、男性は高い「社会志向性N」、高い「問題焦点型」、低い「情動焦点型」が寄与するのに対して、女性は低い「個人志向性P」のみが関わっていることが明らかになった。男性は、社会不適応状態にあり、情動焦点型

の対処法をせず、問題解決に焦点をあてる傾向が「不安」に影響していることが示唆された。一方、女性は自己実現志向の低さが「不安」につながるということが示された。

「絶望」については、男性においては有意な影響因は特定されなかったが、女性の場合は、低い「個人志向性P」と高い「個人志向性N」が関与しており、「自信欠如」に至る影響因と同じ結果となった。したがって、自己実現志向が低く、利己的傾向の高さが「絶望」に関与していることが分かった。

「展望拡散」については、男性の場合、高い「個人志向性N」のみが寄与しているが、女性の場合は、上記の「自信欠如」「絶望」と同じく、低い「個人志向性P」と高い「個人志向性N」が関わっていることが示された。よって、男性は、自己実現志向の低さが一貫性に欠ける将来像に影響するのに対して、女性は自己実現志向の低さと自己中心的特性が影響していることが明らかになった。

「積極的猶予」については、男性においては、低い「社会志向性P」、高い「社会志向性N」、低い「情動焦点型」、高い「回避・逃避型」が説明しているのに対して、女性においては有意な影響因は特定されなかった。このことから、男性は、社会不適応状態が寄与し、また対処法も積極的取り組みは行わず、消極的対処法である「回避・逃避型」が関連していることが示唆された。

「安直」については、男性においては有意な影響因は特定されなかったが、女性の場合は、低い「経験」、低い「社会志向性P」、高い「社会志向性N」が影響していることが分かった。これにより、実習や部活動などの実体験から受ける影響の少なさと社会的不適応な状態が安易な進路選択につながるということが明らかになった。

考 察

本研究は、職業既決・未決定状態に影響を及ぼす要因の検討を目的として進路選択に関する調査を実施した。主たる結果は、以下のとおりであった。

- * 調査時点において、調査対象者の8割以上の学生がなんらかの進路決定をしていた。
- * 対人関係の特徴において、男子学生では社会的側面での自立的態度が、女子学生では自己実現的傾向が、それぞれ職業既決状態を規定する要因として影響していた。
- * ストレス状況下における対処法は、男女ともに情動焦点型の対処法が職業既決状態へとつながることが示された。
- * 他者からの助言や正課外活動などから受ける影響について、男子学生では重要他者からの影響度が高い場合が、女子学生では実習や部活動などの経験が少ない場合が、それぞれ職業未決定状態を規定することが示された。また、女子学生においては、恋人からの影響度が低い場合が、職業既決状態へと影響していた。

1. 進路選択状況の現状

調査の結果、回答者は、就職を目指す就職群、就職と試験を受ける併用群、試験を受ける受験群の3群に分かれ、受験群(45.6%)、併用群(28.2%)、就職群(21.0%)の順で人数が多く、この傾向は男女ともに共通していた。受験群とは、公務員や大学院進学を目指し試験を受ける学生を指す。これは、近年の社会経済情勢の不透明さや不安定さの中にあっても、比較的先行きが見通しやすい公務員職を志望したり、大学院でさらに学歴を積み、専門性を追求する形で卒業後の職業生活の安定を願っていることも考えられるようである。また、約3割近くの学生が併用群に分類されるが、これは学生が選択肢を広げることにより、卒業後なんらかの形で安定する道を見つけ無業者に転じないための対策を自ら講じているとも言えるだろう。

2. 性差と職業既決・未決定状態との関連

男子学生において、社会的側面での未熟度の低さは、職業の既決状態に対して説明力を有していた。社会的側面での未熟度の低さとは、言い換えると周囲に迎合的にならず、自分を取り巻く周囲から自己を健康的に分離させることに成功した、自立性を表すものである。高橋(2008)は、進路決定の過程で、親から心理的支持を受け、議論を交わすなどしている男子は討論を通じて次第に自己を確立し、積極的な姿勢で進路選択に臨むのに対し、進路選択時に親との議論を回避する男子は、他者の視点の内在化に失敗している可能性があり、進路決定の先延ばしをする傾向があると述べている。

これとは逆に、社会的側面の未熟度の高さがある男子学生は、5つの職業未決定状態のうち「自信欠如」「不安」「積極的猶予」の3つに共通して見られた。つまり、他者の意見や評価に過剰に左右され、他者へ一方的な依存をする男子学生は、進路決定に対して自信がなく、焦りや不安を抱えたり、あるいは職業決定を先延ばし続けたいという現実逃避の傾向に陥っていると言える。特に、職業決定の先延ばし傾向を意味する「積極的猶予」は、上述の高橋(2008)を支持するものである。

女子学生の場合は、肯定的な個人志向性の高さが職業既決状態への影響因として、また、肯定的な個人志向性の低さと否定的な個人志向性の高さが職業未決定状態への影響因として説明していた。伊藤(1995)によれば、肯定的な個人志向性とは、自分の個性を尊重し主体的に行動する特性を意味し、これが高ければ自己実現志向の高さを指すが、低ければ自己実現志向の低さを指す。一方で、否定的な個人志向性とは、極度な個人主義や自分勝手さを指し、これが高ければ未熟で未発達な状態を意味する。したがって、本研究では、自己実現志向が高ければ既決状態へと寄与し、低い場合には未決定状態へ、また、自己中心的傾向が高い場合も未決定状態に影響することが示唆された。

ニート・フリーターの若者支援の研究では、若者のもつ自己実現志向の強さが社会に出る上で障壁となっている(佐藤, 2008)という考えがあるが、本研究の女子学生においては、上記のように逆の結果が得られ、女子学生の自己実現志向は職業決定において促進要因となっている。また、本研究の職業既決状態の学生は男女ともに、情動焦点型の対処法をとることが分かった。

上述の若者支援研究の対象者は、職場や学校での過去の失敗経験からコミュニケーションスキルの苦手さを抱え、現在の対人関係にまで影響を及ぼしている女性を含む若者であった。これに対して、本研究の既決

状態の女子学生は肯定的な個人志向性の高さがあったが、それは自己実現志向の高さを示すものである。その自己実現志向の観点からみると、本研究の既決状態にある女子学生は、職業選択において困難を持つ若者と共通している部分もあるが、自己実現志向の高さ自体が直接的に作用し職業の既決・未決定状態を規定するのではなく、自己実現志向と職業既決・未決定状態との間に別の要因が媒介している可能性が考えられる。安達（2004）のキャリア意識の調査からは、自分のしたいことを仕事にしたいという価値観は、現代の若者全般に見られる考え方であり、必ずしも職業未決定状態に結びつくものではないという示唆がある。さらに、安達（2004）は「きっと天職に出会えるはずだ」という適職信仰は職業未決定状態に抑制的に働いており、「将来ぴったりの何かに出会えるというポジティブな見通し」が、既決状態へとつながると分析する。よって、本研究の結果は、将来に向けて物事の明るい面を見ようとする姿勢（情動焦点型の対処法）が職業選択の過程において媒介的に作用し、結果的に、前向きな姿勢の高い者は既決状態へと自らを導いていることが考えられる。

伊藤（1995）の定義にならない、人格の成熟というものをも自己実現的特性と社会的適応特性が相補的に作用している状態とすれば、本研究では、男子学生は社会的側面での自立性が、女子学生は自己実現的傾向が、それぞれの職業既決状態を規定しており、必ずしも両側面が備わっているわけではない。よって、仮説1「職業既決状態にある学生は、自己実現的特性（個人志向性）と社会的適応特性（社会志向性）の両側面を備えている」は棄却される。これは、Eriksonが言うように、青年期とは役割実験をしながら自分の人生を模索し、自己を確立していく時期（岡田、2007）であることを考慮すると、本研究の学生は、自己確立の達成への発展途上状態にあると考えられるのではないだろうか。

次に、仮説2「職業既決状態にある学生は、進路選択において積極的な対処法（問題焦点型もしくは情動焦点型；コーピング尺度による型）をとる」については、上述したように、情動焦点型は男女の既決状態への影響因となることが明らかになった。よって、仮説2は支持される。

最後に、仮説3「職業既決状態にある学生は、他者からの助言や見本と正課外活動などの体験から肯定的な影響を受けている」について、職業既決・未決定状態と他者からの助言、その他の要因との関連性の観点から考察する。職業既決状態に対して説明力を有していたのは、女子学生の「恋人」のみであり、しかも恋人からの影響度の低さが既決状態へとつながることが

示された。つまり、進路選択に際して恋人からの影響が低ければ低いほど、既決状態へと作用することになり、よって、仮説3は棄却される。

3. キャリア教育のあり方について

現代の若者に多く見られる自己実現志向（安達、2004）は、高い場合には、女子学生の職業既決状態に促進要因として作用していたが、低い場合には、男女の両方において職業未決定状態へと作用していた。これは、本研究の未決定状態の学生は、就職もしくは進学などを目前にした時期にあっても、将来に向けて夢や希望を持っていると言い難い状況にあるのではないだろうか。松高（2007）は、不況下において、自分の能力に自信のない学生にとっては、人生に対する前向きな希望を持つこと自体が困難であり、キャリア志向を持っていることを前提としたキャリア教育は魅力的ではないと指摘する。よって、自信のない学生が、任意参加形式のキャリアガイダンスや就職セミナーへ自主的に足が向かうとは考えにくく、このような学生を取り込めるような「セーフティネット」（下村、2006）としての機能を持つキャリア教育が今後必要であろう。

具体的には、学生が自分の進路選択について希望や目標を持てるようになることが第一歩であると考えられる。それは、自分の可能性やしたいことへ意識を向けることを意味し、自己実現志向的特性を高めることになる。ただし、近年のような不況下において、自己実現があたかも可能であるような言説をふりまくだけでは、無責任なキャリア教育になりかねない。したがって、自分の理想や希望を明確にしていく「自分について知る」と併せて、近年における就職内定率の推移、企業側の厳選採用傾向、終身雇用から中途採用への切り替えなど「社会を知る」ことにも焦点を置き、理想と現実の乖離を埋める方向性（安達、2004）が必要である。そのようなプロセスを経て、実現可能な選択肢を見出していくことが今後のキャリア教育に求められているのではないだろうか。

今後の課題としては、本研究の調査対象者は一つの大学におけるサンプルであるということ、また、所属学部や学科が限定されていたことを踏まえると、一般化には慎重を要する。また、学年を基準に対象者を選定したが、就職群と進学群など、進路を基準とした研究も今後必要であろう。さらに、今回は職業既決状態と職業未決定状態へとつながる影響因をそれぞれ検証したが、本研究で検証した説明変数はそれらを説明している一部に過ぎず、本研究では検証しなかった影響因も多数存在している。今後はこれらの点に留意し、青年期における進路選択やキャリア教育の研究をさら

に検討していく必要がある。

文 献

- 安達智子 (2004) : 大学生のキャリア選択－その心理的背景と支援－ 日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 原 清治 (2008) : 日米間における「使い捨てられる」若者の比較 山内乾史 (編) 教育から職業へのトランジション－若者の就労と進路職業選択の教育社会学－ 東信堂
- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 (2006) : 「ニート」って言うな！ 光文社
- 伊藤美奈子 (1995) : 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理学研究, 13(1), 39-47.
- 姜 尚中 (2008) : 悩む力 集英社
- 京都大学 / 電通育英会共同 (2009) : 大学生のキャリア意識調査 2007 追跡調査報告書 [4 年生・就職編] http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa_report_2007-02.pdf
- 松高 政 (2007) : 大学の教育力としてのキャリア教育－京都産業大学におけるパネル調査分析から－ 京都産業大学論集社会科学系列, 25, 145-168.
- 宮城まり子 (2005) : キャリア開発支援とキャリアカウンセリングの実際－キャリアカウンセラーの役割と責任に関する一考察－ 立正大学心理学部研究紀要, 3, 73-80.
- 宮下一博・杉村和美 (2008) : 大学生の自己分析－いまだに見えぬアイデンティティに突然気づくために－ ナカニシヤ出版
- 文部科学省中央教育審議会 (1997) : 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/960701.htm
- 小方直幸 (2008) : 大学から職業への移行をめぐる日本の文脈 山内乾史 (編) 教育から職業へのトランジション－若者の就労と進路職業選択の教育社会学－ 東信堂
- ランジション－若者の就労と進路職業選択の教育社会学－ 東信堂
- 岡田 努 (2007) : 現代青年の心理学－若者の心の虚像と実像－ 世界思想社
- 尾関友佳子 (1993) : 大学生用ストレス自己評価尺度の改定－トランスアクションな分析に向けて－ 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 佐藤洋作 (2008) : コミュニケーション欲求の疎外と若者自立支援－「ニート」状態にある若者の実態と支援に関する調査報告書を読む－ 東京経済大学会誌, 258, 71-85.
- 下村英雄 (2006) : 最近のキャリアカウンセリング研究におけるコミュニケーション 日本労働研究雑誌, 546, 57-64.
- 下村英雄 (2008) : 最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について キャリア教育研究, 26(1), 31-44.
- 下山晴彦 (1986) : 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 白石利明 (2006) : 青年期の歴史的誕生 白石利明 (編) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 杉村芳美 (2008) : 職業を生きる精神－平成日本が失ったもの－ ミネルヴァ書房
- 高橋 彩 (2008) : 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16(2), 159-170.
- 富永美佐子 (2000) : 女子大学生の進路選択過程における自己効力 進路指導研究, 20(1), 21-31.
- 内田 樹 (2007) : 下流志向－学ばない子どもたち 働かない若者たち－ 講談社
- 渡辺三枝子・Herr, E. L. (2001) : キャリアカウンセリング入門－人と仕事の橋渡し－ ナカニシヤ出版
- 山内乾史 (2008) : 「教育過剰論」再考－大学院について－ 山内乾史 (編) 教育から職業へのトランジション－若者の就労と進路職業選択の教育社会学－ 東信堂